

かずみのきもち



かずみさんは、じぶんからはなしをすることが、ほとんどありません。えのぐをつかうと、手をべたべたに よごしてしまいます。きゅうしよくを たべるときも、よく こぼしてしまいます。

よしえさんは、かずみさんに よく こえを かけたり、こくぼんで しりとりを したりして あそんで います。

ある日、よしえさんが 先生の ところへ きて

「先生、わたし かずみが 本 見とつたから、よんで やつてんて。かずみの すきなやつ。そしたら かずみ、おこつてんよ。」
と、おこつたように、でも こまった かおで 言いました。よしえさんが、かずみさんの すきな 本を よんで あげたところ、かずみさんが おこつた かおを して、あつちを むいて しまつたと いうのです。
先生が かずみさんを見ると、かずみさんも、おこつて いるようにも、こまって いるようにも見えませんでした。

☆よしえさんは どうして おこつたのでしょうか。

☆かずみさんは どうして おこつたのでしょうか。

かずみのきもち（小学校低学年用）

A 教材設定の理由

人と人との間では、十分な言葉を使って思いを伝え合うこと、そして相手の伝えようとしていることを、しっかりと聞き取ることは、人を大事にしていくことにつながるたいへん大切なことである。

ところが、他人に自分の気持ちが十分伝わらなくて、行き違いや誤解を招くことは、おとなの世界でもよくある。そして一度生じた誤解を解消するには、かなりのエネルギーを要する。しかしそれを面倒に思っただけで何もしていないと、相手との間に溝をつくってしまうことになる。

自分の気持ちを表現することがまだ上手でない子どもたちの世界では、話せば話すほど感情的になり、対立を招くことがある。その結果、相手のことを一面的に見て決めつけ、クラスの中で孤立させていくことにつながることもさえる。

こうしたとき、教師が間に入って、お互いの気持ちをきちんと伝え合い、理解し合うことを支援していくことは大きな意味がある。ていねいに言葉で伝えることをしていないのに、相手が分かってくれないと思うことは身勝手であること、一方なぜそうした行動をとったのか、十分聞かないうちに勝手な思いこみや推測で人を見ることは人との関係を切っていくことにつながることを感じ取らせたい。

B 教材の解説

本教材は、県内のある小学校における実践をもとに構成した。

かずみさんは、いわゆる「緘黙」の子であった。しゃべらないというだけでなく、表情を表わさないので、なかなか友だちと関わるこ

ができなかった。そんな中、よしえさんは何かとかずみさんに声をかける子であった。休み時間に教室の黒板を使って「次、かずみの番やぞ。『う』のつく言葉やぞ」と言っただけで「う」を渡して、しりとり遊びをする姿は、小さい頃からいっしょに過ごしてきたからこそ編み出された、かずみさんとの遊び方だった。

そんなよしえさんも、かずみさんをいじめた体験をずっと心の重石として持っていた。その心の引っかけかかりを担任に聴いてもらい、「みんなの心はかずみさんに近づいてきてるよ」と言われ、かずみさんがしゃべらないのは自分たちのせいという負い目から解放されていく。そしてかずみさんとの関係をさらに深めていったのだった。

ところがある日、良かれと思っただけであげたことが裏目に出てしまう。かずみさんは、先生に紹介された本が気に入っていた。自分で読みたいという気持ちを持っていた。そんな気持ちがあるままでは知らず、かずみさんの好きな本だから読んであげようとしたよしえさんに対し、かずみさんは腹を立ててしまった。

よしえさんの中には、かずみさんは何かをするときに手助けが必要な子だという意識があった。だから本を「読んであげる」ことに抵抗はなかった。これまでそうしてきても、かずみさんが感情を表すことはなかったのだ。それが、お互いの関係が少しずつ解け始めてくるとともに、かずみさんが感情を表すようになり、このような展開が起った。

そうした背景がなくても、自分が良かれと思っただけで相手に腹を立てるといふ場面はあり得る。子どもたちの中にはそうした経験を持つ子もいるだろう。そんな時、なぜ相手が怒ったかわからず、困ったり、感情をぶついたりすることもあるだろう。

一方かずみさんにしてみれば、お節介をされたことに対して腹を立ててしまった。いちばんその時伝えたかったのは、「自分で読みたい」

ということだったのに、「あなたには読んでほしくない」ということだけが伝わってしまった。こういうふうにして、真意が伝わらないということはよくあることだが、相手がいつも遊んでいるよしえさんだから、誤解を与えたことに対してこちらも困ってしまった。

言葉が足りなくて気持ち伝わっていないとき、まわりにいるものがそれを補いたい。「あなたが本当に言いたかったのは、○○ということなんだね」というふうに確かめることによつて、その子は救われる。かずみさんの場合、担任が「自分で読みたかつたん？」と聞くと、かずみさんは泣きそうな顔でうなずいた。こうしたことの積み重ねが、かずみさんが友だちと関わることへの自信につながっていったのだろう。人と人の心を近づけていく人権教育の確かないとなみである。

C 教材の使用にあたって

言葉を持たない子ども、言葉による表現が難しい子どもの場合、まわりの子どもたちが、日常の関わりの中からその子の気持ちを考え合うことも重要な課題である。

D 参考資料

第五三回全同教大会報告

「みんな、みんな、そのまんまでいいんだ」

小田実由季（尾口村立尾口小学校）

E 授業の展開例

教師の基本発問・助言	学習内容・支援の要領
<p>1 導入</p> <p>①みなさんの中で、人に気持ちが言えなくて困ったことのある人はいませんか。</p> <p>2 展開</p> <p>②教材文を読みましょう。</p> <p>③かずみさんは、どんな子ですか。</p> <p>④よしえさんは、どうして怒ったのでしょうか。またどうして困ったのでしょうか。</p> <p>⑤かずみさんはどうして怒ったのでしょうか。</p> <p>⑥かずみさんはどうして困ったのでしょうか。</p> <p>3 まとめ</p> <p>⑦こんな時、かずみやよしえさんはどうしたらいいのでしょうか。みなさんはこんな経験をしたことはありませんか。</p>	<p>①思っていることが相手に分かってもらえない経験を、思い起こさせる。</p> <p>②状況が分かるように、補足を加えながら何度か読む。</p> <p>③自分の身の回りのことがまだあまりうまくできない子であることを確認する。</p> <p>④子どもどうしの関係の中で、それぞれが想像できることを自由に出させる。</p> <p>⑤自分の好きな本は自分で読みたかったのだという気持ちを推しはからせる。</p> <p>⑥よしえさんを怒らせてしまい、自分で読みたかったという気持ちが伝わらなかったためだとおさえる。</p> <p>⑦かずみやよしえの立場になって気持ちを表現させる。友達と気まずい経験のある児童には、その時に戻って気持ちを表現させる。</p>